

あるべからず戦争の實演は殆ど一切の方
向に限りなく擴がるものなりと我等彼の
上申書を以て學説と爲すよりも寧ろ彼の
經驗の成果なりとせば却りて夫れ或は其
實に近きものあらん(三月三日所論未完)

手帳五月十五日時事

タイムスの日露

戦争批評 (百八十七)

クラウゼヴィッツ學説(下)

先づ守勢態度につきて之を見よ(記) 守勢態
度は其原則集として如何クラウゼヴィッツ云
へり決して全然受動的の位置に留まるべ
勿れ敵の攻撃を起すの時に當たり自ら
出でし其前面及び其側面に當たれど彼亦
曰く守勢態度は其戦線ある長さを有する
時に於て初めて之を用ふべし蓋し敵をし
て此戦線を攻撃せんとするには先づ其兵
を展開せざるべからざるしめんが爲なり
敵その兵を展開するを待ち預備隊をして
即ち攻撃を取らしむべきなりと榮聖の技
術は兵をして胸膈の背後に其身を衝るを
得せしめんとするの意に出でたるものに
あらざ敵を攻撃するに於て其成功を大に

らしめんが爲めなり之を要するに守勢
度は豫め選擇したる陣地に其攻撃を行
んとする手段に過ぎざるなり
クラウゼヴィッツは事の不徹底を断じて
許さざるものなり彼曰く計畫を立てるに
當たりては常に何等かの著大なる目的を
其前に掲げ置かざるべからず敵軍の大部
分に對する其攻撃及び其全破と云ふが如
きは是れなりと我等も少し小なる目的を掲
げて敵大なる目的を有せば是れ恰も銅に
對して金を賭するに等し計畫一たび立せ
られれば其能ふ限りの銳氣を盡くして之を
遂行せざるべからず我等も其攻撃を加
へたる翼面に於て苟も利便を得ば我等は
決意を以て其利便を擴充せざるべからず
即ちラチスホフ及びブグラムに於けるナ
ポレオンの如く之を爲すべしチャール
ス大公の如く半その捷を得たる時に至り
て之に躊躇を用ふべからざるなり是を以
てクラウゼヴィッツ曰く現在の戰
争技術に於て勝利の諸原因中之第一等
の位置を與ふべきものは這の原則にあり
一極度の銳氣と決意とを以て著大にして
且つ決勝的なる目的を遂行すべしと云ふ
是れなりと
攻勢態度につきては彼論じて曰く目的は
味方に有利なる状態の下に其他の地點
に於て之に其襲撃を加ふるを得せしむる
を以てなり
尚ほクラウゼヴィッツの全力を盡くして
論述したる所にして而も普魯西親王に充
分の教化を與ふるを得ざりし一原則
あり決して一時に其兵力を盡くして賭す
るも勿れ斯くの如くんば遂に之を指
する其力を喪失するに至るべし唯だ弱小
の兵力を以て到る處に敵を忙殺し之を疲
勞せしめ最後の決勝期に至るまで其決勝的
大部隊を保存せよ此大部隊既に一たび用
ひらるゝに至らば極度の決意と膽略とを
以て之を動かせといふ是れなり
戰場用兵の此等の大準則いま尙ほ之を回
想するの價値あり蓋し其殆ど百年前に書
かれたる所に於て之が大部分はナポレオ
ンの歐洲に於けたる苦き教訓の結果に成
るものなりと雖も尙ほ我等の以上擧げ
たる所は一語一行みな今日の戰術に之を
適用すべきものなるを以てなり寧ろ其適
用當時よりも今日に於て更に割切なるも
のあらざるや之れ論究するの要ありとすべ
し此等は尙ほ獨逸戰術の基礎を爲すもの
にして我等は又その獨逸政策を指導する
ものにあらずやを疑ふものなく同時に

も先づ兵家の目的とせざるべからざる所
なり作戰計畫は此結果を目的として之を
立するを要す然らば決勝的なるを得ざり
し勝利と雖も尙ほ追撃に其銳氣を用ふ
るに依りて之を決勝的ならしむるを
得べし敵軍の翼に對しては力を集中して
之に其攻撃を加ふべし即ち各面より之に
襲撃を行ふを得んが爲めなり敵たどひ其
方面に充分の兵を有して各方よりする攻
撃に對抗するを得ざるも尙ほ之に依り
て之に其勇氣を沮喪せしめ大損害を負は
しめ且つ之に其秩序を紊亂せしむるも
を得べし——即ち約言すれば之を敗退せ
しむるを得るなり
諸師團及び諸軍團をして其攻撃を同時に
行はしめんとするは一地點より之を指揮
するもに依りて其目的達せらるべきに
あらざるに命するに其相隔つる距離加
何なるに關せず若しくは敵その間を遮断
するもに命するに其接觸を保持
すべきを以てするを以て足れりとすべ
からず一隊の行進を他の隊の行進に依りて
決して左右せしむべからざるなり此方
に依りて行動すべきを軍隊に命するは機
を等しくして其行動を執らしめんとする
目的を達するもに最難道なり斯くの

南洲大戦役の進行に其注意を加へたるも
の一人としてクラウゼツヴィッツの露日
本勝利を指導し露國の敗績に其流弊を
行へるを見る能はざる者あるべし日本の
作戦計畫を先師の理想に達する能はざ
りし軍一の場合 即ち遼陽に於て
其之に價せざる完全なる勝利遂に得られ
ざりしは亦頗る注意すべき所なり
ドラゴミロツフ其試みたる業の徒勞に屬
したるに對して果して如何の言を爲さん
と欲するや我等は之を開かんふと欲す
るの好奇心を有するものなり
(二十三日所論未完)

三十年五月十七日時事

タイムスの日露戦争批評

奉天の會戰 (後論二)

我等の今朝の紙上に掲載せる五面の地圖
は奉天の城下に戰はれたる大會戰の一般
を讀者に示さんとするの意に成れるもの
なり此戰はアウステルリツツ、ウオータ
ールと共に列せらるべきものにして近
時の最大にして且つ最終的なる戰闘の
一に數へらるべきものなり
此大戦闘に關して我等の細密なる報告に
接するは尙は數週日の後なるべく尙は我
等をして双方の運動を一つに探るを
得せしめ之が原因及び結果に研究を加ふ
るを得せしめ行動の全般に對して道理あ
る判断を加ふるを得せしむるが如き戰闘
各局面の地圖及び報告我等の許に達する
は確に數年の後ならざるを得ざるべし
然れども戰闘の一般性質は既に明瞭なり
其主要なる形状を茲に叙述し國民的戰争
の此發作期と稱すべきもの間に於ける
双方大部隊兵の位置如何其最も實に近
き戰闘に關する亦敢て難しとせざるなり
此等の運動は二十四日より數日に亘りて
着々繼續され其一般の結果は露軍指揮官
の注意を其中央及び左翼に牽制し其兵を
此方面に招致し漸次その激を加へ來たれ
る戰闘に關係の大部分を忙殺したるにあ
るを概論する亦敢て難しとせざるなり

此目的に對し我等は此行動中より五箇の
局面を抽出せり即ち此戰闘の經過したる
各段階中その特徴とするものを擧げたる
なり我等の抽出したる此各局面に對し其
知られ得る限りの一般形勢を回應せしめ
んとするには簡短なる説明の圖に附せ
らるるを以て足れりとすべしとす
第一局面(自二月十九日)第一圖
日本の第一攻勢運動は二月十九日の存
翼に依りて起されたり斯くて五日後に至
り清河城にありし強大なる露軍部隊は其
防禦工事内より驅出され北方に擊攘され
たり二月二十四日に至り黒木將軍の第一
軍本溪湖方面よりカオツ嶺(高麗嶺)に
向け前進し本溪湖の北方及び西北方約十
里に存せし其前進陣地より露軍を驅攘し
り此進軍と同時に野津將軍の軍また沙河
に於て其進軍を初め勝利を得たり斯くて
其攻撃は極度まで遂行さるるものとなく自
ら其威嚇的性質を保てり
此等の運動は二十四日より數日に亘りて
着々繼續され其一般の結果は露軍指揮官
の注意を其中央及び左翼に牽制し其兵を
此方面に招致し漸次その激を加へ來たれ
る戰闘に關係の大部分を忙殺したるにあ
るを概論する亦敢て難しとせざるなり

タイムスの日露戦争批評

奉天の會戰 (後論二)

第二局面(自二月二十八日)第二圖
露軍の軍は尙は戰場に加は
るに至らざるも二月二十八日に於
て露軍は沙河兩河の間に展開し同時に
其左方に於て乃木軍陣、遼河の間に北
方に向け極度の速力を以て前進せり此運
動剛勇と敏速とを以て行はれたるが爲め
能く其抵抗を壓伏するを得露軍之に邀撃
を加へたるに關せず驚く成効を以て其目
的を行ふを得たりクロバトキンは三月一
日に至り初めて此運動を窺知するを得三
月二日を以て電報して之が轉回運動に抗
する爲め其行動の取られたるを稱せり然
れども之が危険を覺知するも既に遅く
且つ其取りたる行動また充分なるを得ざ
りし彼の兵は右翼に於て忽ち奉天の方
向に擊退され乃木將軍は速に其兵を配
置して露軍の退却線に其攻撃を加へ得る
の準備を爲せり
然れども露兵を其中央および左翼に擊縛

ロバトキンの決意を動かしたるや我等
は尙は精密に之を語るも能はず然れど
も二月末中露兵の著大なる員數カオツ嶺
及び馬群丹方面に向け移されたるは事實
なるが如く露軍指揮官三月一日を以て報
じて其攻勢を取れるを稱せるは現に之が
證なりとすべし露軍指揮官實際に於て其
攻勢を取り而も到る處みな其効を收むる
も能はざりし斯くの如くにして本戰闘
の計畫その宜しきを得たる準備時階段は
日本參謀本部の明に豫期したる一切の結
果を之に收めしむるを得たるものなるが
如し廣潤なる前面全部に亘りて兩軍の間
に間斷なき砲戰行はる今は決定的攻撃を
加ふるの時機既に至れるなり
(二十五日所論未完)

タイムスの日露戦争批評

奉天の會戰 (後論二)

第一局面(自二月十九日)第一圖
日本の第一攻勢運動は二月十九日の存
翼に依りて起されたり斯くて五日後に至
り清河城にありし強大なる露軍部隊は其
防禦工事内より驅出され北方に擊攘され
たり二月二十四日に至り黒木將軍の第一
軍本溪湖方面よりカオツ嶺(高麗嶺)に
向け前進し本溪湖の北方及び西北方約十
里に存せし其前進陣地より露軍を驅攘し
り此進軍と同時に野津將軍の軍また沙河
に於て其進軍を初め勝利を得たり斯くて
其攻撃は極度まで遂行さるるものとなく自
ら其威嚇的性質を保てり
此等の運動は二十四日より數日に亘りて
着々繼續され其一般の結果は露軍指揮官
の注意を其中央及び左翼に牽制し其兵を
此方面に招致し漸次その激を加へ來たれ
る戰闘に關係の大部分を忙殺したるにあ
るを概論する亦敢て難しとせざるなり

し置く爲めには黒木、野津兩將軍の
大事の場合に其苦業を忍ぶを以て最も
必要なりとす即ち露軍をして決定的攻撃
に對照する爲め其兵を退くるを得せしめ
ざらんが爲め之に自家の兵を犠牲に供す
るを必要とするなり是を以てか右兩軍の
前面には全部に亘りて激戦生じ砲戰漸次
猛烈なるに至り若干の地點に於ては日本
軍大損害を負うて擊退されたり然るも此
等は全體に於て其目的を達したる者なり
何となれば當に諸地點に於て其位置を守
持し得たるのみならず尙は若干の方面
には進歩を見たるものあり露軍約三分二
の兵力を之に牽制し得たるを以てなり三
月五日に至るまでクロバトキンは其右翼
に於ける敵軍の攻撃に甚だしく妨害を加
ふるに足れる其兵を有せざりし此敵軍は
此時に至りて既に其轉回を行ひカウ
リス將軍をして馬家堡より北々東に走
る線上に於て西方に面せざるを得ざるに
至らしめたり
(二十五日所論未完)